

# カリブ海のユートピア／ディストピア

鈴木慎一郎

## 1. はじめに——2010年初夏、ジャマイカの非常事態

「カリブ海のユートピア／ディストピア」というタイトルで今日のお話をするにあたって、まずは一番最近のできごとから話題に入りましょう。

カリブ海に浮かぶ島国の一つジャマイカで、2010年の5月、政府は首都キングストンに関して非常事態宣言を発令し、それは2か月後の同年7月になってようやく解除されました。この話自体、日本語のマスメディアではほとんど報道されておらず、数少ない例の一つとして、朝日新聞の2010年5月28日朝刊の9ページに掲載された「ギャングと政治 癒着清算へ一歩 ジャマイカ衝突 死者50人」という記事があります。

これは、ギャング集団のリーダーの身柄の引き渡しをめぐる、ジャマイカの治安部隊とギャング集団とが衝突したもので、上述の記事が書かれた時点で、民間人側と治安部隊側を含めて50人近くの死者を出していたといえます。

ギャング集団のリーダーは、クリストファー・“ドドス”・コークという人物です。彼はアメリカ合州国内でドラッグの取引に関係した罪で、同国の司法省から起訴されていました。そのため合州国はジャマイカ政府に働きかけを行ない、ドドスの身柄を引き渡すことを要求していたのです。ジャマイカ政府はそれをしばらくの間拒んでいましたが、そののち要求を受け入れてドドスの捜索を始めたところ、その彼をかくまおうとするギャング集団の武装化した若者の男性たちと、ジャマイカの治安部隊とが衝突したわけです。結果的には、6月にドドスの身柄は合州国側へとあっけなく引き渡されました。

こうした事件は、ジャマイカの現代史のなかで、まったく孤立した出来事ではなく、程度や規模の違いはあっても、たびたび起きてきているものです。ドドスのような人物というのは、これまでも幾度か現れています。では、彼のような人物はどのようなカテゴリーにいるのでしょうか。

ジャマイカ国内、それからジャマイカの国外の報道機関や通信社は、ドドスのような人物をたいてい「ギャング集団のリーダー」と呼んだり、あるいは、「ドラッグ王」と呼んだりしてきました。つまり、ドラッグの流通によって力をつけてきた人物、ということです。ジャマイカ国内の報道メディアではその他に、ドドスのような人物のことを「エリア・リーダー」つまり地区のリーダーと呼んだり、「ポリティカル・アクティヴィスト」つまり政治活動家と呼んだりすることもあります。さらに、ジャマイカのより民衆に近い目線からは、「ドン」という、畏敬の念を含んだ呼び方が、広く使われています。民衆からはまた、もう少し親しみを込めて、「父」と呼ばれることもあります。ドドスのような人物は、子としての民衆にとっての、父親的な人

物にあたるというわけです。ギャングのリーダーであり、ドラッグ王であり、地区のリーダーであり、政治活動家であり、首領であり父である、そんな人物とは一体どんな人物なのでしょう。か。

今回の非常事態について報道するBBCの映像 ([http://news.bbc.co.uk/2/hi/world/us\\_and\\_canada/10145295.stm/](http://news.bbc.co.uk/2/hi/world/us_and_canada/10145295.stm/) 最終閲覧2010年11月) などからも伝わるのですが、こうしたドドスのような人物を支持しているのは、必ずしも武装化した若者男性の集団だけというわけではないようです。見た感じでは完全に「普通」の女性たちが、ドドスへの支持を表明したプラカードを掲げ、キングストンの路上にバリケードを張っているさまが、その映像からはうかがうことができます。

こうした事態をどう捉えたらいいのか。国外の報道機関からは、完全にギャングのリーダー、ギャング集団の悪名高いリーダーとされているような人物が、国内においては、決して少なくない数の民衆によって支持されている。このことを、元植民地であったジャマイカ島が国家として独立したその後のポストコロニアルな歴史や、カリブ海地域の特に英語圏の島々の現代史の文脈へと位置づけること、さらには、この講座のテーマである「グローバル・ヒストリーズ」の問題意識に接続することが、本日のこの発表にとっての目標であると私は考えています。

この「グローバル・ヒストリーズ」の問題意識に関係してくるところでは例えば、ポール・ギルロイという研究者が提起したブラック・アトランティックという概念があります。ギルロイのその議論によれば、黒人と黒人ディアスポラの表現文化は、大西洋を間にはさみつつ、一つの対抗的な公共圏を形成していったとのこと。

それから、「カリブは周縁か」という今日のテーマに関係してくるところでは、すぐに思い浮かぶのが、トリニダード出身の思想家であるC・L・R・ジェームズがハイチ革命の研究書『ブラック・ジャコバン』の中で行なった議論です。それによれば、カリブ海地域の黒人奴隷というのは、初めから近代的な存在でした。つまり、英国やフランスなどの西洋の大国がカリブ海地域の植民地に設けた砂糖きびプランテーションというのは、近代以前の時間・空間に属するものではなく、初めから近代の一部であったというのです。ウォーラステインの述べた近代世界システムという概念がありましたが、そうした近代世界自体が、西洋と、カリブ海地域の砂糖きびプランテーションとを、それぞれ中心と周縁の位置に含みこんだ形で、形成されてきたこととなります。「カリブは周縁か」というテーマは、ジェームズのこの議論をふまえた上で掘り下げられなくてはなりません。

## 2. 「世界的に悪名高い」キングストン・ゲッターの成立と、 そこからのポピュラー文化の世界的侵食

ドドスのような人物を生み出したキングストンのゲッターは、どのような場所として歴史的に形成されてきたのでしょうか。だいたい19世紀末または20世紀初めぐらいに、ジャマイカの地方から、職を求めて人がキングストンにどんどん移動してきました。そのころジャマイカの地方では、海外資本のバナナ産業がプランテーションを運営していたのですが、バナナの市場価格が不安定だったため、職にあぶれた者たちは都会であるキングストンに流入していった

のです。

その後、ジャマイカは1962年に英国の植民地という境遇を脱して独立国家になりましたが、独立する以前からすでにキングストンのゲットーというのは、当時拡大し成長しつつあったキングストンという都市が必要とした、フレキシブルな労働力の溜め池という役割を、担うようになっていました。

さらに独立後には、ジャマイカの二大政党——ジャマイカは英国のように二大政党制を採ってきたのですが、二大政党それぞれの有力な政治家たちがジャマイカのキングストンのゲットーを選挙区としてきました——が、選挙の時期になると、ゲットーの若者に例えば銃を配ったりして、票集めのための活動を行なわせてきました。

政治家たちはまた、やはりその支持基盤の確立のために、選挙民に対して、日常的にいろいろな形で物質的な恩恵を施してきました。例えば、職や公営住宅をあっせんするというやり方があります。このような形で構造化された関係は、政治学の用語でパトロン－クライアント関係と呼ばれます。

1970年代には、東西両陣営間の冷戦が、ジャマイカの二大政党間の対立を後押ししました。当時はアメリカ合州国とソ連のそれぞれから、武器がジャマイカの二大政党へと配られ、さらにそれがゲットーの若者の手に渡っていたのだという話が、今日でもジャマイカの民衆のレベルではまことしやかに語り継がれています。

このような背景のもとで、ゲットーの軍隊化、または、特にそこに住む若者男性たちの軍隊化と呼べるような状況が進んだわけです。ジャマイカにおいては、こうしたゲットーはその外部からは要塞コミュニティー（garrison community）と呼ばれて恐れられています。近年の世界各国でみられる、開発業者主導の形で設けられた、監視カメラなどによる防犯の技術を駆使した高級住宅街のことをゲートッド・コミュニティー（gated community）と呼び、こちらの語も日本語では「要塞コミュニティー」と訳されることがあります。しかしキングストンの要塞コミュニティーと、たとえばマイク・デイヴィスがその著『要塞都市 L.A.』において描写しているようなロスアンジェルス要塞コミュニティーとは、そこに住んでいる者たちの社会的な位置がきわめて対照的です。

とは言え、キングストンの要塞コミュニティーが、他の国の要塞コミュニティーと似ている点の一つは、そこが監視社会化の徹底した空間であるという点です。しかしその「監視」とは、開発業者主導の要塞コミュニティーにおけるハイテク化の進んだそれではなく、人口が過密したゲットーにおける対面的な関係性ゆえの、政党や政治家や有力者の悪口を言いたくても言えないような状況から生じているものです。

コミュニティーにおけるこうした緊密な対面的ネットワークを利用して政治家が統治基盤を確立していったさまには、20世紀後半のハイチとある程度パラレルな部分があります。ハイチでは1950年代から1980年代までの約30年間、フランソワ・ドゥヴァリエとその息子ジャン＝クロード・ドゥヴァリエという父子が、続けて大統領の座に君臨して独裁的な政治を行ないました。このうち特に父フランソワは、大統領に就任する前、ハイチにおけるアフリカ系の民俗宗教であるヴードゥーについての民族学的・文化人類学的な調査と研究を精力的に行なっていました。彼はおそらくフィールドワークを通じて、貧困層の住民にとってヴードゥーをめぐる

相互監視的なネットワークがいかに重要であるかを熟知していたのであって、そしてそのネットワークを自己の統治基盤の構築と維持のために活用したと考えられます。

このフランソワ・ドゥヴァリエと似た政治家は、20世紀後半のジャマイカにも存在しました。長年ジャマイカ労働党の党首を務め、1980年代には首相を務めてもいたエドワード・シアーガがそうです。ジャマイカの都市部には、キリスト教化してはいますがアフリカの要素も濃いとみなされているリヴァイヴァリズムという民俗宗教があります。シアーガはこのリヴァイヴァリズムについての文化人類学的な研究を1950年代から60年代にかけて行っていました。彼がリヴァイヴァリズムのフィールドワークを行なった地区は、政治家時代の彼の選挙区でもありました。このような事例は、西洋発の民族学・文化人類学が第三世界において果たした、もともとは決して意図されていなかったはずの役割の一つを示していると言えるかもしれません。

話をジャマイカのパトロン-クライアント関係に戻します。1980年代も末を迎え、冷戦構造が徐々に崩壊してくると、ジャマイカ国内におけるパトロン-クライアント関係の維持も困難になりました。政治家が民衆に与える銃も、その他の物質的恩恵も、だんだんと乏しくなってきました。

そうなってくるとゲットーの住民はどういうふうにするのかというと、政治家に頼れないから、インフォーマル・セクターにおける経済活動によって何とか生き延びるという途を探りました。人によってはジャマイカの国内だけではなく、カリブ海地域や中南米の他の国へ生活物資を買い付けに行き、それをジャマイカ国内で販売するといった、トランスナショナルな小売商を展開する者たちも目立つようになりました。

ドドスのようなドン、つまりゲットーの中でも突出した権力者の場合はどうだったのでしょか。豊かなジャマイカと貧しいジャマイカという「二つのジャマイカ」があると言われるほど、ジャマイカは奴隷制の過去を持つその歴史のために、貧富の差が著しい社会であると言えます。そしてその「二つのジャマイカ」は、両極端の二つの世界をつなぐドドスのような人物を昔から生み出してきました。豊かなジャマイカはしかし、数の上では貧しいジャマイカに圧倒される。豊かなジャマイカが貧しいジャマイカを支配するためには、貧しいジャマイカを代表する者を手なづけなくてはならない。また貧しいジャマイカのほうは、自らの利となるものを豊かなジャマイカから施してもらうために、自分たちを代弁してくれる者が必要になる。ドドスのような人物は、ゲットー出身でゲットーに属しながら、このように二つのジャマイカを仲介する役割にあったのです。しかしながら、パトロン-クライアント関係の崩壊によって、ドドスのような人物は政治家から離れていって自律性を高めていきました。その物質的な基盤となったのが、一つはドラッグ・ビジネスだったというわけです。

また、ドドスのような人物が、豊かなジャマイカに向けて貧しいジャマイカを代弁してきたといっても、それは、ドドスのようなドンがゲットー全体を代表していてゲットーが彼のもとで一枚岩で固まっている、というわけではありません。やはり、ドドスのようなリーダーにものが言えない、批判が言えないような状況を、そういうドドスたちが作り出していくという、相互監視的な仕組みを通じて、ゲットーが無理やり一枚岩にされているような部分があります。

このようなゲットーから出てきたポピュラー音楽やポピュラー文化のほうに話を移しましょう。レゲエに代表されるジャマイカのポピュラー音楽は、この島国の土着的なサウンドである

という触れ込みで世界に広がっていききましたが、もともとはきわめてハイブリッドな始まりを持っており、アメリカ合州国や中南米のさまざまなポピュラー音楽の混成化を通じて形をなしてきました。

レゲエは、1970年代になると、黒人性を称揚するような言葉や、あるいはゲッター出身者があらゆる手段に頼ってでも生き延びようとする生存戦略を肯定するような言葉を、そのサウンドに乗せて運ぶようになります。そして、このレゲエに代表されるジャマイカのゲッター発のポピュラー文化は、1970年代から今日に至るまで、世界各国のジャマイカ系コミュニティと非ジャマイカ系コミュニティの双方へと、トランスナショナル化しています。

先述したギルロイは、ブラック・ミュージックは近代性の対抗的文化であるとの表現をしており、とりわけキングストンのゲッター発のレゲエには、その対抗的文化における特権的な位置を与えているように思われます。ただし彼が1990年代前半に『ブラック・アトランティック』という本で本格的にこの話をした時には、既にちょっと昔を懐かしむモードが入っていたということに、もっと注意しないといけないのですけれども、これは後で述べることと関連してきます。

レゲエのトランスナショナル化について付け加えておきたいのは、多国籍レコード産業によってこの音楽が国際的に売り出されていった過程において、その「起源」の地であるジャマイカのキングストンをディストピア的な場所として描く表象が少なからず見受けられる、という点です。キングストンは人口あたりの殺人事件が最も多い、世界で一番危険な街だという、出所の不確かな情報を、レゲエ音楽をめぐるジャーナリズムはくり返していました。つまり、危ないところから現れてきた音楽が一番面白いのだという一種の好事家的な視線が、ジャマイカ国外の、それも特に非ジャマイカ系の聴き手には少なからずあったと考えられます。そうしたディストピア的なキングストン表象は、さらに、ジャマイカ国内のジャマイカ人音楽家によるキングストン表象にも少なからず影響を与えてきているように思われます。

### 3. われわれは何者なのか、何者になりたいのか——

#### クレオール・ナショナリズムと左派、そして、両者が共有してきたもの

ここではまず、ジャマイカを中心としたカリブ海地域の英語圏における、脱植民地化やネーション建設に向けたヴィジョンとして、どのようなものがこれまで提示されてきたのかを述べます。そして、そうしたヴィジョンは、ドドスが取り仕切っていたような都市部のゲッターにおいて生成するポピュラー文化を、どのように位置づけてきたのかを考えてみます。ネーション建設のヴィジョンは、都市の猥雑なポピュラー文化を、その中にどう取り込もうとしたのか、取り込めてきたのか、取り込もうともしてこなかったのか、という問いです。

脱植民地化に向けて1930年代から現れた動きに、クレオール・ナショナリズムというものがあります。それはカリブ海地域英語圏の他の島嶼部、例えばトリニダードなどでも起きた動きでした。1930年代末には外国資本のバナナ産業に対しての労働争議がカリブ海地域英語圏では頻発しますが、この時の労働争議を主導したのが、人種的にはムラート（アフリカ系と白人系との混血）に属する、弁護士などのエリートでした。同じ層の彼らが、1960年代になると国家

独立を推進していきました。

こうしたムラートのエリートが描いた国民統合のヴィジョンは、基本的に言って、多様な人々の調和によって一つの国民を、というものでした。これはジャマイカであれ、トリニダード・トバゴであれ、バルバドスであれ、カリブ海地域の旧英国領では、「多様なものを統合して一つにする」という、似たようなヴィジョンが掲げられました。新興国家ジャマイカが掲げたナショナル・モットーは“out of many, one people”というものでしたが、それはしかしラスタファリアニズムの立場からは反発を受けることになります。

ラスタファリアニズムは、1960年代まで強かった傾向として、自分たちアフリカ系ジャマイカ人のルーツはジャマイカではなくエチオピアにあると主張し、海の向こうにあるアフリカ大陸のエチオピアをユートピアとして想像し、なおかつ、アフリカが植民地化される前の、または奴隷貿易が始まる前の純粹無垢な過去を理想化しました。ラスタファリアニズムはまた、聖書の黙示録のように、それまでの抑圧的な世界に唐突で劇的な変化が訪れることを待望しました。

ラスタファリアニズムのこのような歴史観は、文化的な同化が一方向的に進行するという発展的な歴史観を持つクレオール・ナショナリズムにとっては、非常に違和感のあるものだったわけです。クレオール・ナショナリズムは、政治は英国的なものを良しとし、経済に関してはいわゆる先進諸国のそれを目指して、文化に関しては19世紀英国のヴィクトリア朝的なリスペクタビリティという価値を核としたそれを理想としていました。クレオール・ナショナリズムからすれば、すべてのジャマイカ国民はリスペクタビリティを強調した文化へと漸次的に同化していかななくてはならない。しかしラスタファリアニズムは、そうした時間意識をまったく共有しなかったのです。

クレオール・ナショナリズムはまた、新興独立国家としてのオーセンティックな文化コンテンツをどのあたりに想定したのでしょうか。ナショナリズムの後発組であるがゆえ、先行する国民国家に比べてジャマイカ文化の独自性は何なのか、という時に、結局それは、過去という時間、または農村という空間に、求められました。農村に昔から伝わっているとされる文化コンテンツが、これから発展していくべき真のジャマイカ国民にとっての共通の国民的記憶であるとして言説化されていったわけです。

それに比べて都市のポピュラー文化は、国外からの要素を日々取り込んで常に生成変化をしているものなのですが、まさにそれゆえにクレオール・ナショナリズムからすれば不純で粗野なものとして排除されることになります。

1970年代には、ジャマイカでも左派政治の実験がしばらく行なわれた時期がありましたが、結局その左派政治も、1930年代以来のクレオール・ナショナリズムと同様に、進歩と発展の物語を共有していました。左派の場合は特に、階級闘争を経ていずれはユートピアが訪れるのだという思想を有していました。そうした70年代の左派の立場からすると、都市のポピュラー文化というのは、無秩序でわけの分からない、そのままでは決して革命の主体になることができないような後進的な存在であり、エリートによる教化が必要なものであるとされたのです。

このように都市のポピュラー文化は、脱植民地化に向けたこれまでのプロジェクトが思い描く国家統合やネーション建設のヴィジョンの中に、有効な形で言語化されてきたとはいえない

ことになります。

#### 4. 「モダン・ブラックネス」が提起するもの

「モダン・ブラックネス」という語は、デボラ・トーマス（Deborah A. Thomas）という文化人類学者が2004年に著した *Modern Blackness: Nationalism, Globalization, and the Politics of Culture in Jamaica* という本から直接引っ張ってきたものです。トーマスは、キングストンを中心としたジャマイカ都市のポピュラー文化について、モダン・ブラックネスという概念を用いて記述を行なっています。

現代ジャマイカ都市部のポピュラー文化の特徴は、トーマスによれば、一つは「脱領土性」です。ジャマイカ国内に居住するジャマイカ人よりもジャマイカ国外に居住するジャマイカ人のほうが数の上で圧倒的に多いといわれるくらい、欧米諸国へのジャマイカ人のディアスポラ化が、新自由主義的グローバル化のもとで進行しています。ジャマイカのポピュラー文化はどのように離散したジャマイカ人によって実践されている部分が少なからずある、というのが、脱領土性です。

二つめは、「歴史性」です。モダン・ブラックネスは、奴隷制や植民地支配の歴史が残した痕跡とは決して断絶してはいないブラックネスである、ということです。その意味でこれは、ポストモダン・ブラックネスとは異なります。

三つめに、モダン・ブラックネスは、クレオール・ナショナリズムや70年代の左派政治とは違い、ユートピア的あるいは革命的な未来を思い描くというわけではなく、むしろ「いま、ここ」への志向によって特徴づけられます。

四つめは、「ラディカルな消費主義」です。モダン・ブラックネスにおいては、服や靴やジュエリーや車やバイクなどの商品の私的な消費を派手に誇示することが、システムに対する局地的な戦略となります。

トーマスが論じたこのモダン・ブラックネスという視点は、決して例外的なものではありません。90年代以降に次々と発表されている、ジャマイカ都市のポピュラー文化についての研究にみられる一つの主調を成しているといえるものであり、現時点でも示唆を与えてくれます。

まず、トーマスがそこにモダン・ブラックネスを見出しているような、現代のジャマイカの文化的生産物の中には、非常にディストピア的な都市表象が頻出しているということが指摘できます。それは例えば、現代のレゲエ音楽に付随するものとしてジャマイカの映像プロダクションが制作する、ハリウッドの大作SF映画の雰囲気ともさほど遠くないプロモーション・ビデオ（PV）の類いがそうです。そこでは、近未来のキングストンを舞台に、警察と軍とギャングが衝突を重ね、どの勢力も最先端のデジタル技術や兵器を駆使していたりします。レゲエのPVの中に認められるこうしたディストピア的な都市表象においては、しかしまた同時に、ダンス・パーティーのようなユートピア的な時空間が、都市の中にあくまで一時的に、飛び地的に現れるかのような描かれ方をされてもいます。ここにかがえる感覚は、トーマスがモダン・ブラックネスについて記している「いま、ここ」への志向ときわめて合致するものです。

そのことをふまえておいたうえで、モダン・ブラックネスについては、いくつか再考をすべ

き点があるように思われます。

一つは、第三世界の都市を牧歌的・前近代的なものではなく近未来的なものとして描いたディストピア的な表象というのは、レゲエが国際化の段階に入った1970年代の時点で既に、グローバル文化産業の側が抱く欲望と、親和性のあるものだったのではないのでしょうか。つまり、キングストンは危険でやばいところで、そういうところから出てくる音楽だからすごいのだ、といったような形で、当時の新奇な音楽としてのレゲエが、キングストンという場所をめぐる（先進国の側の半ば独りよがり的な）想像力とともに、グローバル文化産業によって消費されていくような局面が確実にありました。

もう一つとして、こうした都市のポピュラー文化を「ブラックネス」として色彩語彙化することに関わる問題を挙げるができます。再びギルロイの論を取り上げると、彼は、PVのような視覚表現がきわめて優勢になった1980年代以降の黒人の表現文化について、非常に否定的な評価をしています。1980年代の、いわゆる企業的 multiculturalism が世界規模で広まっていく中で、黒人文化がもっぱら視覚的なものとして商業化され、そして、黒い身体、黒い肌、褐色の肌がそうしたPVの中でフェティッシュ化されてきたことを、ギルロイは批判しているのです。

このような、旧来のエキゾティシズムやレイシズムを再強化してしまうような否定的な契機を、モダン・ブラックネスは、そのどこかにこっそりと忍ばせてしまっているのではないか、という疑問があります。

## 5. むすびに代えて

ジャマイカで非常に人気があるラスタファリアンの音楽家の一人にシズラという歌手がいます。そのシズラは、2010年2月にアフリカのジンバブエ共和国で、大統領ムガベが68歳を迎えた誕生祭の一環として催されたコンサートに出演しました。このことの歴史的意義とは何なののでしょうか。

1970年代にレゲエ音楽を世界的に有名にした、やはりラスタファリアンの音楽家であったボブ・マーリーは、1980年2月に、ジンバブエ独立を祝って現地で行なわれたコンサートに出演しました。その年から数えて30年後に、ジャマイカのラスタファリアンのアーティストが、ジンバブエという国を再訪したということになるのです。

言うまでもなく、ムガベという人物は、非常に悪名高い独裁者です。ボブ・マーリーがジンバブエを訪れたときにすでにムガベは首相の座にいたと思いますが、その後のムガベは、ジンバブエの黒人国家化を強め、独裁的な体制をしめます。そして、彼の68歳の誕生日に再びジャマイカのラスタ系アーティストがジンバブエを訪問し、公演を行なったのです。

ここにある、歴史が一周したかような感覚は、どのような状況を示唆しているのでしょうか。一つ思えるのは、旧来の白人至上主義を、ひっくり返したような形で黒人至上主義の、その契機が、しかも、カリブ海ジャマイカの都市発の現代ポピュラー文化によって媒介される形で、大西洋の両側において存在しているのでは、ということです。しかしそれを考察するには、細心の注意が必要です。相手にレイシズムという嫌疑をかけることは、それ自体が、認識論的な他者化において用いられる常套手段の一つであって来たわけですから。